

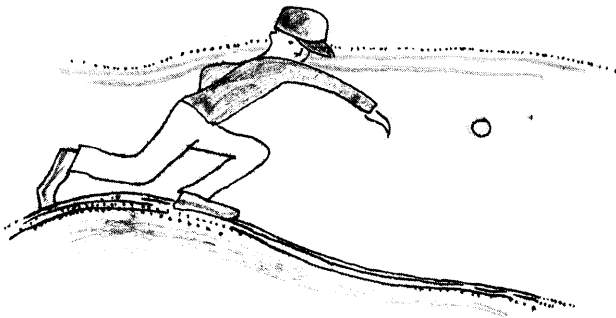
自由保育の原点を求めて

—— 幼稚園とは何だろ——

小川 剛

はじめに

附属幼稚園長になってから、しばらくして、ある小学校の行事に招かれたことがあった。その時、強く印象に残ったことは、先生方の児童への命令・指示の音がとくに際立ったことである。児童の行動は、ほとんどすべて、それらによって律せられていた。学校とは、このようなところであったのか、と改めて痛感させられた。私自身、戦中・戦後の教育を受けて、その対照的なことに驚



かされた経験をもち、職業柄、成人の学習活動に参加することが多く、そこでは、ほとんど、命令・指示の声を聞くことがない。また勤務園でも、子どもたちのにぎやかな遊び声は聞こえても、先生方の命令・指示の声はあまり聞くことはない。子どもたちは、遊びの中で、すくすくと成長している。そんなことから、幼稚園そして教育の場は、もっと子ども本位のところであろうと思いついていたところから、前記の体験がショックとなったのであろう。

その後、意識的に、学校についての見聞を拡げるなかで、前記のことは、いわゆる行事時だけのことではなく、日常的な学習指導の場面でもみられる一般的な現象であり、また、それは、小学校だけに限られたことではなく、学校教育全体が、いわば命令・指示によって支えられているといっても過言ではないような状態が拡がっていることを知った。現在、学校では、児童・生徒は、自らの責任と判断による自主的な行動ができる存在とされているようにある。これで人間らしい人間が育

つのであろうか。これは、大きな問題である。しかし私たちの当面の課題ではない。

ここで問題にしたいのは、幼稚園の学校化である。私のささやかな見聞でも、それはかなり進んでいるようである。幼稚園でも、先生の命令・指示の声が飛びかい、学校顔負けの教科指導がされると聞く。そこでは、子どもたちは、己を殺して、ひたすら先生の命令・指示を待つ「対象」となってしまうている。これは、おかしいのではないかと、素人園長でも思う。

ときあたかも、文部省による新教育要領の公表があった。そこで示されているものは、勤務園のあり方こそ本筋であり、学校化したものは、それを踏みはずしたものであることである。これに勇気づけられて、「幼稚園とは何か」の探究の旅に出かけることにした。素人の新鮮な眼差しをもって。

一、

幼稚園は、本来、子どもたちの自発的な行動を重視し

て、あまり命令・指示を行わないところである。なぜだろうか。それは幼児教育の原理とそれにもとづく保育方法に由来するものである。このことをあきらかにするためには、その原点に立ち戻らなければならない。

そもそも「幼稚園」の原語は、ドイツ語の「Kindergarten」（子どもたちの庭）であり、この創出者はフレibelである。アメリカは、世界的に、幼稚園の発展に尽した国であるが、それでも、あえて「Children's garden」と英訳せずに、原語のまま、それを用いている。

このことは、フレibelの精神を生かしていこうという意識がそこに働いていることであろう。このことから、幼稚園の原点は、フレibelのなかに求められなければならない。

かれが幼稚園の構想を得るまでには、長い道程があった。

かれは、生後間もなく母を失い、牧師として多忙な日々を送る父、かれをあまり理解しない継母のもとで、淋しい少年時代を送った。これがかれの教育論の土台をな

す原体験となった。暖かい家庭愛と母への憧憬の念は、かれの教育論全体の低音基調となっている。それが、後半生において、幼稚園の構想・家庭教育の重視となつて、主題となる。

少年期を過ぎて、かれは、いくつかの職業を経めぐつて、二三歳の時、偶然に、教育にかかわるようになる。そこで、かれは、「水中の魚、空飛ぶ鳥のように幸せである」と感じた。天職との出会いである。しかしそれを一年でやめ、その後、ベスタロッチのもとで二年、さらに、ゲッチンゲン、ベルリンの両大学で、それぞれ学んだ。

一八一六年、三四歳で、甥の教育を引き受けたことを契機に、自らの思想と方法による学校経営に乗り出す。当初は、グリースハイムであったが、一年後、カイルハウに移り、そこで一四年間、妻のヴィルヘルミネ夫人、友人のミッデンドルフ、ランゲタール、そして兄たちの協力・援助を得て、その教育事業をつづけた。そこでの体験・思索にもとづいて書かれたものが、かれの主著と

される『人間の教育』（一八二六年刊）である。ここで、かれは、自己の教育原理を生み出すとともに、教育の出発点である家庭教育・幼児教育の重要性を見出した。その後、また、いくつかの教育的遍歴を経て、一八三七年、五五才で、ブランケンブルグにおいて、幼児教育に本格的に取り組むこととなる。そこまでの道程は長く、またこれこそかれの教育理論の原点でもあった。そしてそれを具現化したものが幼稚園だったのである。したがって、その本質を見定めるためには、かれの教育論の基本をおさえておかなければならない。

二、

フリーベルによれば、万物には神が宿り、したがって、自然物にはもちろんのこと、人間Ⅱ幼児にも神的东西が内在し、それがそのものの本質をなしていると考えられる。それらの本質、すなわち神的东西は、「永遠の法則」にもとづき顕現するが、それを十全に実現させることは、万物の使命・天職とされる。たとえば、植物の

発芽から結実に至る過程は、まさに、その使命の達成過程であり、人間も、同じ法則に則ったり、その発達過程を通して神的东西を顕現化を図るべき存在である。しかも、この過程は、神的东西の顕現化であることから、内から外への自発的な活動として現れる。幼児にみられる発達の自発性の重視は、以上のような根拠にもとづくものである。

この過程を十全なものとするためには、神的东西が人間により意識化されていること、また人間が自由にかつ意識的に神的东西に従って生きることができると、さらに神的东西を自由に表現できるように人間が高められていること等の条件が整えられる必要がある。そのために、人間を刺激・指導し、その内的法則と神的东西のものを自覚的に表現できるようにすること、ならびそのための方法・手段を提供することが、人間教育である。

この神的东西の自発的な活動は、全く善以外のものではありえないから、妨害されないかぎり、それは必ず

善であり、また善でなければならぬとした。したがって求められる教育的態度としては、あくまでも受動的・追隨的なものでなければならぬ。とくに、幼少期での命令的・規定的な教育は、子どもの内的なものを損ってしまうおそれがある。

以上のことから引き出されるフレーベルの教育論のエッセンスは、まず、親・教師は、自然・人間の本质について十分な認識をもち、子どもの自発的な行動を尊重し、またそれを十分に観察し、内から現われてくるものならばそれを支える法則の働きに注意し、それらの十全な実現のために助力することにあるといえる。フレーベルは、『人間の教育』のなかで、このような教育原理を編み出した。

また、幼児教育については、「内なるものの自由な表現」であり、「未来の全生活の子葉」でもある遊びの意義が見出され、両親にそれを大切に育てることを求めている。しかし幼児教育の重要性を実感的に把握するようになったのは、スイスでのいくつかの教育体験を通して

であった。そして具体的な方法として生み出されたものが、恩物であった。子どもの成長・発達を内在するものの顕現化とみるフレーベルにあっては、幼児教育とは、子どもに、その精神の自己表現のための「適当な材料」、すなわちそれに適した遊具を系統的に与えることを意味した。そしてかれが重視する「遊び」と「作業」とを独自の象徴主義により表現した。そのための遊具が恩物であった。そして今日にいたるまで、恩物を主要な遊具として幼児教育を行うところは、フレーベル主義幼稚園とよばれている。

当初におけるかれの幼児教育活動は、恩物の製作・普及活動であり、その過程を通して家庭教育・母性教育の再発見がなされ、幼稚園教育と結びついていく。

一八四〇年六月設立された「一般ドイツ幼稚園」は、狭義の幼稚園ではない。それは、母性教育を目的とするものであり、「児童を愛する女性のための直観や教訓の場所であり、初期の幼児の保育や作業に関する直観もしくは教訓の場所であった」（莊司、同上書、一九七頁）。

幼児教育施設は、母性教育のための実習所だったのである。そこでは恩物を使った保育活動が行われたのである。これが、今日の幼稚園に発展していくにあたっては、当時の欧米諸国での幼児教育をめぐる状況、とくにアメリカにおけるその普及と、そこでの理論ならびに実践での深化が、あずかって力があつたといえよう。ここでは、紙幅の関係から、これについては、割愛したい。

三、

現代に生きるフレールベルの幼稚園、すなわち自由保育方式をとる幼稚園では、どのような保育が行われるのか。「わが国のフレールベル」ともよばれる倉橋惣三の『幼稚園真諦』（昭和九年刊）をもとに、その姿を描いてみよう。

幼稚園の究極的なねらいは、子どもたちが遊びと作業とにより「自己充実」をとげていくことで成長していくのを助けることである。

そのためには、まず、そこでの活動は主役である幼児本位のものでなければならぬ。このことは、そこでの生活形態が幼児に適していること、すなわち幼児の自然の生活形態であることを意味している。したがって、幼稚園が配慮すべきことは、幼児たちがそこに来て、ラクに自分たちのものと感ずることができるようになることである。さらにいえば、幼児自身が自分の生活を充実する工夫を自らもっていることを信用して、充分な自己充実ができる自己の天地をもつことができるようにすることなのである。

そのためには、幼稚園は、幼児自身がその自己充実力を充分に発揮できる設備をもち、さらにそれに必要な自己の生活活動のできる場所となっていなければならない。いいかえるなら、幼児たちの生活は設備を通して発揮されるのであるから、幼稚園には、幼児の多種、多様な活動を予想して、豊かな設備がととのえられることと、幼児のめいめいにその設備を使わせていくにあたって、幼児に生活の自由が充分に許されていることが必要

なのである。ともかく、幼児の自由感こそ設備を生かしていくものなのである。幼稚園は、幼児たちが伸々と自由感を味わいながら、いろいろな設備を使いこなし、自己充実を図っていくところなのである。

「自己充実」といっても、幼児自身、だれの助けもくはず、自力でやるものもおれば、そののできないものもある。そこで、幼稚園では、そのような幼児を対象に「充実指導」が行われる。これは、相手の内部に即しての内部指導であるから、実施に当ってはその子が何をどの位まで「充実」することを求めているかをはっきりさせ、その子に合った内容を、合った方法とレベルまで指導するという細やかな配慮が求められる。

「自己充実」とは、幼児は幼児なりに自分の生活の意味を理解し、それを発展させることで成就感あるいは達成感を味わうことである。マズローの言葉を使えば、自己実現というものを幼児なりに体験することといえる。したがって、そのためには、幼児は、それなりにその生活についての意味づけを行わなければならない。ところ

が、幼児の生活は、刹那的で断片的であって、そのままでは意味づけが困難である。刹那的で断片的な生活に系統性を与えていくことが必要である。これを「幼児生活の誘導」とよんでいる。これは、幼児の興味に即した主題で幼児たちの生活を誘導することである。たとえば、幼児を水族館に見学につれていくことで、魚についてのかれらの生活に系統性を与えていくことが考えられる。現在、高度に発達している視聴覚的手法を使うことで、より容易かつ効果的にこれを行うことができるであろう。

幼稚園では、この「誘導」につづいて、「この子には、もう一つこれを付け加えてやりたい」ということから、「教導」を行うこともある。しかし、これは、本来、学校教育の本領とするところであって、幼稚園教育としては、最後にあつて、むしろちょっとするだけのこととされている。つまり「幼稚園はどこまでも、幼児の生活たる本質をこわさないで教育するところに、その方法の真諦が存する」のである。

最後に、フレーベルは、自分が構想した幼児教育施設に「キンダーガルテン」（子どもの園）という名称を与えた。このことについて、倉橋はつぎのように述べている。

「園とはこれ、実に、自ら生育すべき種子が、周到なる園丁に保護せられ、育成せられて、その発達を全うするところである。そこには、野生でない自然がある。温室でない培養がある。放任でない自由がある。抑圧でない管理があり、強要でない期待がある。のみか、園の一字に、何という心持ちのあたたかさ、や

わらかさと、うるおいとの感ぜられることであろう。

フレーベルが幼児の教育について抱懐する理性と感情とが、美しくも盛り込まれているのみでなく、正しくて素直なる感触を以て、これを他に受け取らしめる」

（『フレーベル』）

ここに、幼稚園のたましいが、あり方が、余りなく示されている。幼稚園は、何よりも「子どもたちの園」なのである。

（お茶の水女子大学）

変わること 変らぬこと

M · H